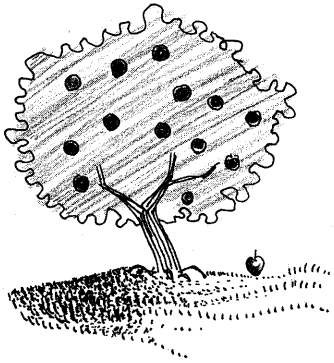
思い出の中の保育 (4)

守永　英子

三十余年の保育生活には、さまざまな思い出がある。ひとりひとりの子どもの、小さな活動の一こま、一こまが、目に浮かぶこともあれば、数人から十人以上の大きなグループでの盛りあがった活動が思い出されることもある。

遊戯室（ホール）全体を使っての、〝おばけ屋敷〟も、私の記憶に、まざまざと残っている。と、いっても、私は、おばけ屋敷に入れてもらった客の一人に過ぎず、目に浮かぶのは、おばけ屋敷に入れてもらおうと、遊戯室の前の廊下に列をつくって並んだ、小さい組の人達の姿である。



いつ、どのようにして、おばけ屋敷の相談が、まとまっていったのか、残念ながら捉えていない。ただ、おばけ屋敷をするために、他の組の先生に、遊戯室のカーテンを引いて、暗くしてもらったという報告を受けた。年長組のときのことである。

廊下に待つ小さい組の人達を、数人ずつ誘導して中に入れ、少し経つと、外で待っている子どもと入れ代えて、整然と遊んでいる。

誘われて、私も順番を待って中に入れてもらった。大きなBブロックで作った長い車に、数人のお客さまを乗せて、暗い遊戯室の中を一周する間に、二、三か所から、おばけがでてくるのである。子どもたちが、両手でおばけのようすをしながら出てくるところもあり、棒につけた糸の先に、紙で作ったおばけを吊るして、突き出すところもあり、後ろから静かに現れて、肩をポンポンと叩くのもありで、一周する。

これだけのことであったが、遊戯室の前には、翌日も、朝から小さい人達の列ができ、子どもの世界のおもしろさを感じたことであった。

この活動の推進力の一人だったと思われるK男の、三歳児クラスのときの姿も、印象深く残っている。日ざしが少し強くなり始めた六月初め頃であったろうか。K男は、水を張った園庭の池の前にしゃがみこみ、自分の靴を片方ぬいで水に浮かべて、それを眺めていた。子どもの小さな試みを、そっと大事に、見ていることは、保育者として心楽しい。

年長組の三学期になると、子どもたちは、卒業を惜しむかのように、活発に活動する。グループも大きくなり、遊戯室の大積木なども、沢山使って、大きなものを作るようになる。他の組との共有の遊び場であり、共有の遊具であるから、「使いたい」「貸してくれない」のトラブルがよくおこる。担任としても、仲よく分け合って使ってほしい、と思う一方で、大きなものを作りたいという気持ちを、満たしてやりたいとも思う。

年長組の三学期にはいって間もなく、保育室では、卒業アルバムにはる絵や、はり絵

や、名札づくりに忙しくなりはじめる頃、男の子たちのグループが、遊戯室の大積木に熱中しはじめた。高くするために、長方形の積木を立てて板を渡すやり方は、大人をはらはらさせる。遊戯室に近いクラスの先生が、時々見ては、危険のないように注意してくれたし、私も、時々遊戯室に足を運んでは、積み方に危険がないか見たり、子どもたちにも、気をつけるように注意を促した。だんだん高く積み上げるようすに、「止めた方がいいのではないですか」と他の組の先生から、注意を受けたが、あまりの熱中ぶりに、そこでとめてしまうことが、ためらわれた。折よく、観察記録をとりにきていた先生の話では、彼らは大変に、注意を払いながら積んでいるということで、私も、不安に耐えながら、もう少し、辛抱することにした。

翌日も、朝早く登園した子どもたちは、遊戯室にとんでいった。たいした熱中ぶりであった。

でき上がった大積木の構築物は、私を驚かせるのに充分であった。四層に積まれた積木の屋根は、天井近くまでそびえていたし、三層目には、とび箱が置かれていた。これだけの高さまで、どうやって積んだのであろうか。この重いとび箱や積木を、どうやって、この高さまで持ち上げたのであろうか。大変な努力と集中力である。

いずれ片づけられ、姿を消してしまうこの力作の前で、私は、写真を撮ってあげることで、彼等の努力を称えることにした。推進力になった子どもは、余程うれしかったらしく、「先生が写真を撮ってくれた」と家で報告したという。

私をはらはらさせたこの危険な作業は、子どもたちにとっても、緊張と努力を必要とす

るらしく、ありがたいことに短期間で終わった。

入園当初、心細げに泣いていたり、引っこみ思案だったりしたこの子どもたちは、二・三年の間に、何を糧に、このたくましさを養ったのであろうか。子どもたちだけで創り出していく活動のおもしろさ、すばらしさに、畏敬の念をおぼえたのであった。

（元お茶の水女子大学附属幼稚園）

▲　遊戯室の大積木